静中・静高
関東同窓会
会報

静中・静高関東同窓会
会報　第33号
平成4年6月19日発行
編集人　上杉重吉

勇断

政治と行政について思うこと

47期　山上信重

私は昭和二十七年八月、保安庁創設と同時に同庁官房総務課長に任命された。総務課長としての最初の仕事が初代保安庁長官を兼任された吉田茂総理を本庁にお迎えする行事だった。

着任されると総理は保安庁幹部を一堂に集めて初訓示をされることになっていた。この時、総理は突然新聞記者は会場の外に出てもらえと言はれた。記者諸君はぶうぶう言いながらもしぶしぶ退場してくれたので、私は直ちに会場のすべてのドアを閉ざさせた。だがそれは何故であるかはこの時は未だ分らなかった。

ところが総理は開口一番保安隊は軍隊である、諸君は新国軍の幹部としてその創建に努力するようにという趣旨の訓示をされて会場を去られた。その間、私は脚ががくがく震える思いをしたことを今も覚えている。

当時、保安隊は軍隊であるなどということは、政府関係者は誰も言えなかったことである。ところが総理自らがこの言葉を口にされたので、私は甚だびっくりすると同時に、目から鱗が落ちる思いをしたものである。

その後二年間、私は木村保安庁長官の下で防衛庁設置法案、自衛隊法案（防衛二法案）の国会通過のため日夜下積みの苦労を味わったが、この頃は自衛隊の実力は戦力に至らないから憲法九条に違反しないという説明に終始して国会を乗り切り、ようやく昭和二十九年七月、防衛二法が成立したのを覚えている。

だが憲法九条の解釈は、その後時間の経過と自衛隊装備の向上に合わせて更に前進し、昭和三十年代以降には自衛権は独立国家固有の権利であるから、自衛のための武力行使は合憲だとする意見が一般的になって来たことは周知の通りである。

かくして吉田総理の下で自衛隊法は成立し、次いで岸総理の時代には、日本の防衛に対する日米間の協力を強化するための日米安全保障条約の改訂が強行された。この二本の大きな柱を軸に、勿論その他の外交努力も加わって、日本の安全は東西両陣営の冷戦下にも拘わらず長期に亘って磐石の如く保たれて来たのである。この間日本の経済は順調に回復、成長を続け遂に世界第二位の経済大国にまで発展することとなる。

このような事実を踏まえて言えることは、我々のような行政官は法の運用に主眼を置いて考えるくせがついているが、真の政治家は何が国家と国民の為に必要かということを第一に考え勇気をもって決断するということである。

ところが近頃の政治家にはこゝのところが甚だ欠けているように思えてならない。

先の湾岸戦争の時も世界中を挙げて違法な侵略者を懲らしめようと国連中心に立ち上っている時に、日本だけが過去の憲法解釈にとらわれてぐずぐずしていたのはまことに笑止の沙汰と言えるし、近頃も雲仙の災害などでもいち早く特別立法でもして被災者の苦しみを救う方途を講ずべきと思うのに、これ又現行法ではどうだとかこうだとか言っているのは甚だ歯がゆいことと思える。

年来の政治課題であった政治改革や国際協力についても、いたずらに与野党間の政治的駆け引きのみが目につき、政治改革は始めからやる気なし、国際協力はPKO法案の形骸だけを残してお茶を濁そうというようなお寒い状態である。

政治と行政に関して考えさせられることが甚だ多いように思うのは私だけであろうか。

（元防衛施設庁長官）

同期会など

四三期

平成四年一月二十日第九十四回四三会を、第百十七回の三笑会を兼ねて両替町の三笑亭で開いた。

顧みれば終戦直後の混乱期であった昭和二十一年八月三十日に第一回のクラス会が開かれてから今日まで、クラス会が連綿として続いているのも幹事の方々の御努力と会員各位の熱意の賜である。

昭和三年三月に卒業した年が母校創立五十周年記念の年に当り、昭和二十八年は同じく七十五周年記念であった。クラス会も度々開かれ昭和三十六年六月十七日に第四十三回目に当る記念すべき四三会を伊豆山の聴音閣で開催した。恩師を含めて総勢四十三名となり重ねての数字の魔力に宴も盛大に祝福することができた。

昭和四十三年は丁度明治百年に当る年で、第五十八回の四三会を四月三日午後四時三十分開会で日本平の望岳荘で開催した。恩師を含め三十三名が集り新緑の日本平で富士を眺めての清遊を味わえた。

昭和五十三年は記念すべき母校の創立百周年に当り、我々も丁度卒業五十周年にも当る年であった。秋晴れの十月七日に城内にあった当時の駿府会館で記念式典が催された。夕刻より提灯行列の大街頭行進となり甚だ意義深い催しであり、静中・静高百年史も刊行された。四三会も引続いて第七十八回を三笑亭で開催し、関東・関西からも出席して二十八名で祝杯をあげることができた。

平成二年は四三会員は傘寿を迎える年で二月二十日第九十二回の四三会を第九十四回三笑会を兼ねて開いてお互いの長寿を祝福したが、我々が米寿を迎える西暦二〇〇〇年には四三会も第百回となり三笑会も丁度二百回となるので、双方併わせて三百回を寿ぐことになる。誠に万々歳の限りである。

これを目標にして充分健康に留意して頑張って生き抜くことを誓った。

当日は三笑亭の鋤焼き鍋を囲んで大いに気焔をあげることができた。これからも四三会・三笑会へ多数の会員の出席をお願いする次第である。

今回の連絡通知往復葉書とその後の調査で会員の情勢を取りまとめた。現在は合計五十名である。

静岡地区　二十五名
関東地区　十七名
中京地区　三名
関西地区　四名
広島地区　一名

この内で御療養中の方も二十名ほどおられるが、近代医学の発達で、是非御快方に向かわれて健康を回復されますよう祈り上げる。

御他界された方も百八名になり連絡不能の方も十六名である。

新幹事も新任され左記の三名の方が受持たれた。

高須　彰・見原三郎…連絡員
八木友治…会計

これからも四三会本部を中心に関東支部・関西支部と緊密に連絡して四三会を運営していく所存である。

今度の新年会の出席者は遠方よりの出席者は都合が悪く残念ながら静岡地区のみとなってしまった。

磯谷幸一郎、河村　亮、近藤伊佐男、近藤久一郎、高須　彰、滝口亀太郎、堀田利郎、松永清平、見原三郎　（西沢純三）

「今年もよろしく」と新年会に集まった元気な顔，顔，顔。

その後の同窓会活動

（平成3年12月～4年5月）

◇新年会兼幹事会
1月24日（金）18時～
新日本証券地下一階食堂
出席者…51名

・会報32号の発送依頼　ほか

◇役員会
2月27日（木）18時～
新日本証券役員会議室
出席者…会長・副会長など10名
と、大雄の山田氏
・同窓会の現況と今後の運営、特に事務局関係につき協議。

四五期

久しく45期会の便りをいたしませんでしたが、皆様如何お過しでしょうか。

この便りの先ず最初に佐野理平君の訃について述べねばならぬのはまことに残念です。佐野君は去る3月2日外出の途中で倒れ、救急車で運ばれて入院、当初のうちは比較的元気であったようです。しかし、その後容態が急変し、私が3月24日に見舞った折には既に意識不明の状態で、言葉を交わすことはできませんでした。その翌26日早朝亡くなられたとのことです。

28日の通夜には柏木、草野、鈴木、田附、速水の5名が集まり、霊前に焼香し香典を捧げて参りました。佐野君は有楽町での45期例会の常連で、度々身近かで親しく付き合った仲間だっただけに、彼の突然の不幸はまことに無念です。皆様と共に謹んで冥福をお祈りする次第であります。

お互い傘寿を迎え、体の部品が傷んだり、いろいろな機能が衰えたりして、我ながら情なやと託つことが多くなりました。この老化現象は多少ひどくても、家族が力を合わせ警め合い励まし合えば、何とか日常生活のリズムは保てるのではないでしょうか。しかし、予期せぬ病気に罹った場合には、自覚している以上に老化による体力・機能の減衰が進み、そのため快復に手間どったり、病後に後遺症が残ったり、さらに余病を併発するなどして、日常生活のリズムを余儀なく崩される恐れがあります。45期の仲間にも病気療養を生活の主軸としておられるのではないかと思われる方が増えて参りましたので、私の承知している主な人達を挙げてみました。

○伊藤敬三君は最近胃潰瘍の手術（胃100％切除）を受け療養中。

○蝦原一郎君は脚が不自由で歩行困難。

○大石清君は今年1月前立腺肥大の手術、引き続き胃潰瘍の手術（胃2／3切除）を受け療養中。

○黒田明彦君は脳硬塞を患い、その後遺症と合併症で療養中。

○草野哲君は口腔内の手術を受け療養中に愛妻の入院・逝去にあう（現在は元気です）。

○竹下定吉君は膝痛で歩行困難。

○堀正治君は心臓の動悸が激しく安静療養中。

○松林晋一君は三年前に心筋硬塞で倒れ、心臓近くに血管のバイパスを作る手術が成功し命拾い（現在は元気で会社勤めに精励中だが要注意）。

以上何ともうっとうしい事ばかり挙げましたが、これらの方々にいつ会っても、電話で話し合っても、どなたもみな明かるく元気な声が返ってくるのでホッといたします。恐らく皆さんは病気と闘うのではなく、病気を仲よしとして自分の中に取り込み、毎日の生活を組み立てておられるからではないかと察します。敬服して止みません。一日も早い全快を祈り上げます。私事ですが、私も腰椎変性症と両膝関節症のため週二回リハビリに通院し、さらに高血圧症で月一回診療に通っています。

皆様ご存じのように去る四月一日静岡市の喜久屋で45期の「傘寿記念会」が開かれました。関東から松林、速水の両君と鈴木が出席しました。当日の会の要点のみを報告いたします。

○出席者24名で盛会でした。生憎の雨天で、浅間神社の神殿でのセレモニーは中止。喜久屋の広間で記念撮影。

○前回の求友亭の会以後亡くなられたのは次の通り（敬称略）。

渡辺修、三宅二郎、千葉保次、本間正三郎、新田正良、井手喜久郎、佐野理平

○歓談をつくした後、全員で校歌を斉唱し、次回の再会を期し三本じめで会を閉じました。以上

（鈴木弥門）

五一期

「今年の春の会合は何時だね」という問い合せが今年の年賀状にのる位、会員は集まるのを心待ちにしている。われら五一回生は東京と静岡というように一年に二回会合を開いている。

今年（平成四年）は通算四三回として四月十日（金）に東京の築地スエヒロで開かれた。集まる者の中に静岡から狩野君と牧野君の元気な姿が見えた。

話を聞いていると健康に関することが多い。芦田君は昨年、内臓の一部摘出という大手術をして体重が減ったというが、顔色も良いし元気だ。

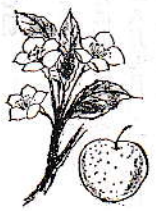
牧野君の孫が今年静高に入学して、これで三代つづいて静中・静高で学ぶことになったとの話があり、一同拍手で祝った。また牧野君が「この中に今まで病気で入院したことのない人が何人いるかね」と尋ねたところ、手をあげたのは五人はいなかったように見えた。しかし、みんな食慾旺盛で、はじめに出た料理では足りなくな

◇幹事会
3月27日（金）18時30分～
新日本証券地下食堂
出席者…35名
・同窓会の今後の運営に関して
・新役員の改選について

◇役員会
4月24日（金）18時～
新日本証券役員会議室
出席者…10名
・前記の具体案の検討・協議

◇幹事会
5月15日（金）18時30分～
新日本証券地下食堂
出席者…37名
・新役員の改選に関して
・平成三年度事業と会計報告
・平成四年度予算と行事計画
・総会案内状の発送依頼

◇第五回卯高会ゴルフ会
5月28日（木）
箱根カントリー倶楽部
参加者…26名
優勝　仁科光司（77期）
2位　奥沢　徹（59期）
3位　野方重人（77期）



り追加する羽目になった。おわりに「岳南健児一千の」を四番まで歌い、再会を約して解散した（みんなよく歌詞を覚えているものだ）。

当日の出席者は、芦田正之、飯田鉄雄、伊藤濵吉、大富部国男、狩野安彦、桑原英夫、高橋達郎、田中賢一、下山富太郎、永井五一郎、難波悦郎、林盛次、原崎郁平、藤田修二郎、牧野三郎、宮野守信、森弘、渡辺寛孝。合計十八名。

（原崎郁平）

五四期

細井（中川）君を悼む

四月二十四日午後七時、細井君が肝臓癌で逝去された。

六月の総会には必ず出てきて最近は小生と二人きりしか居ない五四季会を淋しく語り合ったものであったが、昨年六月、珍らしく彼が欠席したので、どうしたのかと思っていた矢先、大畑君から細井君が亡くなったと電話で知らされた時には一瞬自分の耳を疑った。

二十八日、京成お花茶屋駅近くの葬祭場へ大畑君と二人で行き、霊前に別れを告げたのであった。

細井君は昨年三月頃、肝臓に腫瘍が出来たが、今年の一月、その腫瘍が大きくなった。しかし、年齢のこともあって手術が出来ないまま、二月六日、順天堂に入院したが、そこで癌の告知を受けたとのことであった。その後、話が出来る状態にまで回復していたところ、四月二十四日、昼頃まで普通に過ごし、二時の回診も別状なかったのであるが、そのあと、五時頃、一リットルもの出血を見ると血圧が急速に下がり、意識不明の状態に落ち入った。そして七時、遂に不帰の客となった。

幼い頃からの親友であった渡辺源司君から、故人を懐かしんで追悼の思い出話を電話してきた。

細井君は、小学校の頃はおとなしい少年であったので、村長のお父さんが心配して、彼のために邸の中庭を野球場に開放して友達に彼と遊んでくれるように頼んだくらい内気な少年だった。請われて細井家に入ってから、積極的な人間になったように思われる。

小生が上京して間もない頃のことだが、在京の有志が集って浅草「菊水」で東京五四季会を催したことがあった。

会のあと、大畑君と小生が連れられてキャバレーに押しかけて遊んだことがあった。

気っぷがよいので人気があったのだろうか、ホステスに彼は大モテであった。静中時代の彼を知っている我々二人には、何が彼をこんなにまで明るい人間にしたのかと、その豹変ぶりに驚いた。そのような彼だから、今の細井組を業界トップの座に築き上げたのだ。

平成元年十一月十八日、新橋の「太洋」で、関東五四季会を催した時、細井君は次のようにスピーチを行なった。

「僕は学校は建築（日大工学部）だが、縁あって左官屋になった。そして仕事に精出して、今ではダイヤモンド社の調べでは全国第二位になっている（これは一位が純然たる会社であるから、細井組がオーナー会社としては実力ナンバーワンということらしい）。

これは、経営上、定着しない労働力を確保するため、自分の発想で、従業員養成について持ち家制度を取入れた結果、従業員の離職を食い止め、仕事に集中することが出来るようになった。そして、清水、鹿島、竹中から絶大な信頼を克ち得たのが会社の発展につながったものと思う」

と、意気軒昂たるものがあった。

今や君は亡い。ただ、細井君の霊よ安かれと祈るのみである。

（庵原悌次）

五七期

一、東京での同期会は二月、八月、十一月に開いている。昨年の夏からでは八月七日、十一月七日、そして本年二月七日であった。場所は八月が東京八重洲口のカウベル、あとの二回は凸版印刷の本社内である。いずれも前副社長の月見里君の肝入りである。集まる面々は十人程。二時間ばかりの雑談だが、病気の話が余り出ないのはいいことだ。

二、私どもも昭和十七年三月に卒業して本年は五十年、半世紀を迎える。例年五月に静岡で総会を行うが、本年も熱海で記念総会を開催することになっている。そして特に文集を作成して配布する。本部の世話人からの報告によると、出稿者は七十余名、在籍者のほぼ半数である。担任の諏訪先生、守屋先生から一文をいただき、故本告先生の遺稿が掲載されることになった。なかなかの圧巻のようである。今から期待している。

私も拙文をものした。題して「先生方の折々の言葉」。その末尾に次のように書いた。「静岡中学では、まさに、精神の糧を与えられ、文化の原型を作っていただいたわけである」と。

（影島利邦）

六〇期

一年半ぶりに四月十八日、静岡常磐町の求友亭にて同期会が開催され、55名が参集した。

関東地区からの出席者は、有田克己、井田淳、上杉重吉、尾崎龍男、笠間達男、小林金次、斎木学、沢田祐夫、堤崇、原善三郎、原田龍二、山本雅之助の12名。

恩師は諏訪卓三、北川巻平、三浦朝治、八十島実の四先生が元気な姿で出席してくださった。

物故者の冥福を祈って黙祷したあと、乾杯。その音頭は、ローマから来日中の岡村崔カメラマン。

昭和十五年の静岡大火直後に校門をくぐり、激動の五年間、静中生活を送った我々の友情は厚く、結束は固い。大広間は賑やかに歓談がいつまでも続いた。

初参加の沢田君は狭山市鵜ノ木に在住。しばらく東京での同期会を開いていなかったが、彼の話をゆっくり聞く集いをという提案もあった。

なお、所用などのため当日欠席の諸兄から届いた近況報告がコピーされて全員に配られて好評であった。世話役諸兄の努力に心から感謝したい。

校歌斉唱で閉会、またの再会を約して、三々五々街へ繰り出していった。

（上杉重吉）

六四期

四年四月二十三日、前日の大雨突風が、うそのように快晴の日本晴れ、ここ静岡県、富士山の麓の小田急西富士ゴルフ倶楽部に、十五名が集まり、東京・静岡合同の第十四回ゴルフ大会を催すことが出来た。常連の稲森照男君の父君が御逝去されたとの報せがあり、一同御冥福を祈った。

春たけなわ、吹く風も肌に心地よく、緑のじゅうたんと木々の若葉が芽ぶき始め、その中を鯉のぼりがゆうゆうと泳いでいた。今年もまた、こうして学友と会い一緒に白球を打ちながら、談笑し合える喜びを感謝したい。そして、その嬉しさのため昨夜は寝られなかったと話す佐野旭君。

第一回に出席以来十二年振りに登場の増田誠男君（東京書籍副社長）、奮闘したが同ネットながらハイハンディのため惜しくも四位。優勝は、静岡の会合に出席するより東京の衆のこの会に出る方が何よりの楽しみという風間政彦君。二位は村上喜代治君。

最多打数でもハンディで、ブービーは神谷武男君、先月母君の米寿の祝宴を一族打揃って行なった由、心から御祝い申し上げる。

前三回ともブービーだった岩本吉雄君が今回はメーカーとなった。だが病気回復してゴルフを楽しむようになったのだから幸せだよね。今後も健闘を祈る。

他の出席者…渡辺宏一君、新井彰君、石原良昭君、浅井幹夫君、永田進一君、渡辺素夫君と大石次男先輩。

（野沢正憲）

六七期

六七期記念誌　国会図書館へ

昨秋の卒業四〇周年記念同窓会の折、記念楯と同時に発刊配布した記念誌「ああづら　こうづら」を国立国会図書館へ寄贈しましたところ、別掲のような礼状と「日本全国書誌」が届きました。コピーですが掲載させて戴きます。

われわれ67期生が学び勤しんだ動乱の戦中・終戦直後から現在までの貴重な資料・写真と記述が満載された記念誌です。

国会図書館へ赴くことがありましたら是非ご高覧ください。

「ああづら　こうづら」の閲覧請求ナンバーはFC36－E128となっております。このコードナンバーと書名を提示すれば、何時でも閲覧できるとのことです。

なお、母校の図書室、静岡県立図書館（静岡市谷田町）、静岡市立中央図書館（静岡市大岩町）にも納本されております。

（67期卒業40年記念実行委員会）

「日本全国書誌」への記載事項

FC36－E128
ああづらこうづら　印高67　静岡　静中・静高67期四〇年委員会　1991.9　113p　26cm
卒業四十周年記念　発行所：静中・静高67期同期会事務局
1.アアズラ　コウズラ　s1.シズチュウ　シズコウ　ロクジュウシチキ　ドウキカイ　s1.静岡城内高等学校（静岡県立）　①FC36　⑧376.4
(JP92-11881)　＊

納本ありがとうございました

国立国会図書館

〒100 東京都千代田区永田町一丁目10番1号

電話 (3581) 2331・2341(代表)

このたびは、貴社(殿)が発行された貴重な出版物をご寄贈いただき誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

ご寄贈いただきました出版物は、文化財として永く保存するとともに広く公共の利用に供して、貴意に添いたいと存じます。

当該出版物は、当館が編集する「日本全国書誌」に掲載し、全国に広報させていただきました。

ここに、その掲載号を一部同封いたしましたので、ご高覧下されば幸甚に存じます。

今後とも出版物を発行された場合には、当館にご寄贈賜りますようよろしくお願い申し上げます。

国立国会図書館収集部収集課

哀悼

岩崎　康君逝く

42期　宮澤　次郎

春未だ浅き三月三日、康さんは遂に逝ってしまった。

自分の身体の中の力が抜け落ちてしまうような気持がして、私の心には大きな風穴があいてしまった。

康さんは、われわれの静中仲間の名物男であったと共に、社会人としても俠気一徹、常に正義をまもる男一匹として、関係業界は勿論、ひろくソニーの盛田昭夫会長さんのような大実業家から絶対の信頼と友情を寄せられていた。

康さんは、われわれ同窓生の仲間として最も誇らしい懐しい人物であり、静中魂のシンボルともいえよう。

康さんが静中五年生であった昭和元年、母校静中は野球で甲子園に優勝し、街を挙げて祝賀の提灯行列を行なったが、その時に真紅の野球優勝旗と共に、十本余りの各運動部の全国大会優勝旗が一緒に行列に参加し、静中健児の意気は正に天を衝くの慨があった。

康さんはその時代、応援団長の井出君や中川、国分の諸君と共に全校生の中核となって頑張ったものだ。

百十余年の校史の中でたゞ一度の甲子園優勝の思い出と康さんの名利を超越した意気軒昂たる生涯とを思い合わせるとき、私は、しみじみ無量の感慨に耽けるものである。

心から、本当に康さんのご冥福を祈って已まない。

訃報

43期　山家　清
平成4年4月6日逝去

45期　佐野　理平
平成4年3月26日逝去

54期　細井　庸司
平成4年4月24日逝去

回想・随感・近況など

静岡の万葉を歩く（その四）

51期　原崎　郁平

安倍川の西岸、静岡市みずほ三丁目の長田南中学校校庭に次の万葉歌碑がある。

坂越えて　安倍の田の面に
居る鶴（たづ）の　ともしき
君は　明日さへもがも
（巻一四―三五二三）

大意は「坂を飛び越えて　安倍の田の面に降りている鶴　そのように珍しいあなたは　明日もどうぞ」

茶褐色の石（幅一・一五メートル、高さ一メートル）に黒磨き石が左右二枚嵌め込まれ、右にこの歌が二行に彫られている。左の黒石には学校の沿革と校歌が刻まれている。

長田南中学校沿革
昭和廿二年五月長田南小学校内に新設
昭和廿六年一月広野海岸に移設
昭和四十四年九月現在地に新築開校

校歌

作詩　勝　承夫
作曲　団　伊玖磨

海に黒潮　胸には血潮
若いいのちの　力が燃える
大気よせ来る　母校の庭に
富士も希望の　朝を呼ぶ
長田南　栄あるわれら

昭和四十四年度新築
第一回卒業生

この場所に行くには、駿河大橋を渡り、国道一五〇線を南下し、二・五キロメートル位行った所の信号を右に折れる（信号には場所名は書いてないが、右に八木恒という家具屋の看板、左は酒所たぬきの看板がある）。百メートル程直進すると左に長田南中学校が見える。正門を入り左に行くと東門があり、東門に向って右側に歌碑が立っている。

このあたりは今は家が建て込んでいるが、私が在学中には一面に見渡せる田圃で、晴れた日には富士山がよく見えた。国道一五〇線は用宗を経て大崩海岸を通っている。土曜日の午後、放課後に友達と自転車に乗って此処を通ったことがある。懐かしい大崩海岸を昨年車で通ったが、昔と変わらない所と大きく変わった所がある。波打ち際はあまり変わっていないが、自動車道路のトンネル部分が災害で崩れて塞がれ、新たに海上に突き出た道路で迂回している。

安倍川橋の東のたもとに安倍川餅屋がある。その名は忘れもしない「石部屋」である。慶長年間に創業したというのだから、もう四百年近く開いていることになる。きなこ餅のことを「安倍川餅」というが我が国で普通名詞になったのは大したことである。

きなこ餅は別名「きんなこ餅」といって、徳川時代に近くの金山から金に因んで家康公に献上されたといういわれがある。だいぶ前の話であるが、店に入って行くと「いらっしゃいませ」という景気のよい挨拶がある。それから餅を搗き始めるのだろう、杵で搗く音がする。随分時間が経ってから注文の品が皿に盛られて出てくる（今はどうかな）。

品種は三つ位あり、「あんこ餅」「きなこ餅」、それにわさび醤油で食べる「からみ餅」で、この中ではからみ餅が珍しい。この店の特徴は店頭で食べさせるだけで、

市中に卸さないと聞いた。静岡に住んだ人は生涯、石部屋の味が忘れられないであろう。私もその一人である。

時の流れ

55期　山本　孫一

上越新幹線が東京駅から出る様になって横浜に住む身には何か便利になった様な気がする。日曜の夕方、発車間際の車内には立っている人の姿が見えた。まさかと思った最前列の席が幸運にも空席、窓側の青年にことわって直ぐ坐った。三十歳位の若いサラリーマン風。

さて、日本人は総じて人の集まる席でも列車の席でも孤独が好きなのか、お互いにわずらわしさを嫌うのか、メッタに隣席に声を掛けたがらない。殻を閉じている二枚貝に似ている。

ところが永年営業畑ばかりで来たためか、私は雑談の中から世間の情報を得ようとする癖がある。旅の車内はチャンスなのだ。チャンスは生かす。退屈しのぎにもなる。近頃の若い人は一体どんな考えを持っているのだろうか？

一つ屁理屈をお許し願いたい。そもそも人はそれぞれ自分を中心とする経験や知識の或る半径を持っている。そしてその埒内で物を考え、判断し、行動する。勿論日常それで良いのだが、同時にこの世界では自分の知らない事象や、事象相互の関係があり、また自分が未だ感じたことのない感覚的経験も多くあり得るということだ。つまり知らない、経験のないことの方が圧倒的に多い。或いは知っていることを一とすれば、知らないことは無限にあるかも知れない。そして案外その半径の外側なるものによって、内なる自分は知らぬ内に絶大なる影響を蒙っているのではなかろうか。これを肯定する人は謙虚となり、かつ或いは未知に対して行動的となる。

これに対し若者の場合では、元々人生経験が少ないので半径も小さい。小さいから反って内圧が大きい。時にほとばしって未知に平気で跳び込む。それは大自然(神)が彼等に与えた贈物、エネルギー即ち若さなのだ。確かに世の中には八十歳にならないと判らないこともあろうが、三十歳でなければ出来ないこともある。

×　×　×

この席に居たらしい若い女性が窓の外から、隣席の青年に手を振り、列車は動き始めた。

「ヤア、お陰様で座れました。失礼ですが、どちらまで？」

「明日からの仕事の新潟へ帰るところです」缶ビールを取りながら彼は答えた。「彼女はフィアンセです」若い時は二度と無い。清潔で物おじしない、明快回答の青年に訊ねた。「これはうらやましい。ところでお帰りになってどんなお仕事ですか。」「公務員です。」「安定した職業ですナ。」「えゝ。」「ひょっとすると学校の先生ですか。」「いゝえ。父は教師で停年間近かです。兄も教員になりました。」私も缶を開けながら言った。「人を造るお仕事ですね。やり甲斐のある、尊敬される職業でしょう。それで、あなたは？」「自信が無かったんです。それに学生時代に考古学に興味を持って。毎日生かせるこの職場を選びました。父は停年になったら国内旅行を楽しみたいと言ってますから、両親の計画に私も大賛成なんです」「役所で考古学？　縄文とか弥生とかの。」「えゝ発掘に立合うんです。アチコチ土地開発が進むにつれ、掘ると色々と出るんです。」「藤之木古墳とか……。」「あれ程でなくても遺跡って土に少し埋って到る所にあるんですよ。そのまゝ保存すべきか、また出土品を収集するとかを決めるんです。」「藤原鎌倉の頃も？」「それはあります。もっと近代の徳川幕府時代から明治へと。」二本目の缶を私が買って渡し、飲み終える頃にはすっかり親しくなった。「ご結婚は？」「来月半ばです。」「ハネムーンは。」「東南アジアから中近東へ。」「戦前シンガポールというと、南国の夢の島という感じでした。当時海外へ出た日本人はほんの少し。海外とはオトギ話の響きを持ってました。それが今や年間五〇〇万人も空を飛んで出掛ける時代になって。夢が現実になったのか、今が夢なのか。」「ところで考古学は明治大正昭和の第二次世界大戦迄を対象にしています。」「えっ。何千年も昔からつい半世記前までですか。」「人類の生活の跡を調べその社会を想像します。戦後生れの私達にとってそれらは皆歴史の痕跡なんです。」「ウーム（小生も化石人で考古学的対象とされてしまったか）」

そこでこの化石人は、内は昔、戦争中の銀座の焼野原、目の前の爆弾で首の飛んだ子供を背に、知らずに走っていた母親や、三月十日の下町の焼夷弾攻撃、立川の飛行機工場の集中爆撃、生命の危険、芋蔓のスープ、高粱のおかゆ、灯火管制、その解除の時の目のさめる光の有難さなど……を語った。彼は「ハアー、そんな事があったんですか。」と驚く。「戦前、車を持っている家庭など皆無。アメリカでは一軒に一台あると聞いて大金持の幻の国と思った。米国の真似から始まった子供のような自動車業界が、数十年後にビッグスリーに追付き、打撃を与えるに至るとは思いもよらず。カラーTVなる電気自動紙芝居が各家庭に入り、居ながらにして世界の出来事や映画を茶の間でくつろいで見られる、世界のうまい物が食べられるし、遊びの種類も数知れず、その他……。昔から見れば皆さんが王侯貴族の生活に近いんじゃないかしら……」

往古の比較話を延々と二人で楽しんでいるうちに（もっとも小生の方が良い聞き手を見付けたようであるが）、長岡駅に着いた。名刺を交換して別れたが、折目の正しい中々の好青年であった。息子の場合にはこうはいかない。昔話はもう沢山だと逃げられてしまう。近づく幸福の足音をわくわく待ち受ける率直な青年は、化石人から見た近未来人といえそうであ

る。

×　×　×

時代は平和そのものである。今年は靖国神社の夜桜の花見に参加しながらその昔の浅間神社の桜を思い浮かべた。広い境内で何千人か打ち興ずる若人の中に老境は少ない。席を抜けて一人拝殿の前で柏手を打った。後世を願い信じた幾多の英霊は、この日本を見詰めて微笑んでおられるか。我々は更なる後世に伝承を続けねばなるまい。天を覆う満開の桜の花びらがひとひらふたひら盃に落ちて、春は爛漫であった。

アダナの話

60期　笠間　達男

四月十八日に静岡で六十期の同期会があり五十五名が集った。今まで物故者とされていた沢田祐夫君が参加して、昭和十七年の予科練入隊から航空自衛隊空将補で退職するまでのことを話したので、五十年前の中学時代の思い出がいっそう甦った。その昔の話が当時の先生方のことになると名前よりアダナが先にでてくるのだった。当時職員室の出入りには軍隊式に自己申告して用事を言うようになっていた。私は「ヌマカン先生に用事があって参りました」と言ったとたん、当の沼館先生に叱られたことがある。

入学当時の櫛崎校長が顔をゆっくりと左右に回して生徒を見るのでセンブウキ。矢部教頭が顔の形でゲタというのを始め、たいていの先生にはアダナがついていた。それを思いだしてみよう。

①姓名と関連するアダナでは、トウヘイさん（中村藤平・化学）マンジュウ（高原真重・数学）モッチー（望月・国語）モトキッちゃん（本告・国語）トコさん（床並・英語）サルマタゴロウ（勝又五郎・体育）ブキさん（普喜・英語）コッピー（古曳保正・柔道）ヌマカン（沼館・歴史）ヤソさん（八十島・数学）など。

②風貌や身体的特徴から。ガマさん（諏訪卓三・英語）デコ橋（板橋・公民）額の輝きでトロ（杉村・修身）左右非対象のイビツ（西田・歴史）どうみてもゾウさん（村上・図画）ポチはかわいい？（竹田・物理）チョーセン（三上・数学）ツボまたはネコ（小池・数学）ションジー（後藤・教練）長身のチョータ（福島・英語）小粒なアズキ（下野・歴史）ネコ（杉山雅吉・書道・国語）何となくポンポリン（山岸・教練）あごなしリュウセン（山下・英語）若禿のクリッパー（藤岡・地理）エロパンはエロパン（渡辺・博物）カマキリはカマキリ（片田・博物）ズーさん（斎藤・音楽、作業）オジョーさん（松永・国語）怒ると一発ピクリ（金子・漢文）ヒゲダルマ（阿部男也・柔道）ピーピー（宮林・体育）など。

③仕事などからきたもの。プール監督の名物先生、ブーカン（家永・数学、物理）性教育をしたため気の毒にもエロジー（佐野・教練）発音からドンチュウ（杉山・英語）論語を教えた亜聖（松村・漢文）サムタイムをソメチメスと読んだという伝説？（普喜・英語）サッツー殺人鬼（死鬼森、式守・体育）は戦後女子高の教師に！。

今と比べて昔は教師によくアダナをつけた。それだけ生徒にとって教師への関心が大きかったのではないだろうか。

私も教職四十年なのでアダナがいくつかある。まず、教育実習で『海坊主』といわれ、新任の学校では『でくのぼう』と呼ばれた。後者は先輩の教師が「雨ニモ負ケズ」の授業で、「でくのぼうとは…」という生徒の質問に「笠間先生のような人のことだ」と答えたためだというから光栄である。

同期会では兄のアダナを受けついだガス（杉本武）から「ヌケもよくきたな」と声を掛けられた。ヌケサクは私がチョータにつけられたアダナで、在学中は上級生や仲間からは『ヌケ』と呼ばれ、下級生からは敬意？を籠めて『ヌケさん』と呼ばれたことが懐かしい。

父子二代母校に勤めて退職した同期の杉山茂樹（英語）は在学中は父親のアダナからコネコといわれていたが、今の高校ではアダナはなかったのではないか。

同期会に迎えた北川先生は静中先輩で戦後も約二十年間、母校にお勤めになったが、当時は新婚早早だったので「先生眠いでしょう」と私たちは冷かしたものである。久しぶりにお会いしたら今でも眠そうな目をしたマキヘイ（カンペイ）さんであった。

再出発を楽しみに

61期　仲野　辰男

私は住友ゴム（ダンロップ）系列の販売会社に勤めておりましたが、五十二歳の時に脱サラし、未知の世界の民宿旅館を経営いたしました。当時は時期も環境も恵まれたのでしょう、順調に業績を伸ばすことが出来、同僚達も驚いておりました。その間、同級の金子正名夫妻、富永辰典君、中野佳彦君、山崎和夫夫妻、大石次男君、先輩の佐藤祐信さん、故人の石原良典君等が見えた時は、昔の悪童に戻り雑談やらゴルフやら磯釣りをして楽しい日々を過ごしました。

しかし六十一年頃よりバブル経済が芽生え始めリゾート開発が活発となり、各企業の福祉施設が増え始め過去のような業績の伸びが期待出来なくなると同時に、私の体調が悪くなり平成元年末に廃業しました。

現在は同じ千葉の八街市（落花生、西瓜の名産地）に移り住んでおります。

学生時代は「チビ」なのに長距離、マラソンが得意の私の強心臓も歳には勝てなく高血圧・狭心症の病名をもらう破目になりましたが、約二ヵ年の通院のお陰で昔の体調に戻りつつあります。

現在は世界一の長寿国となり平均寿命は世界人類始まって以来の記録とのことです。つい四十年前には五十歳程度であったことを考えるとすばらしい勢いで長命が延びたわけです。しかし寿命が延びたのは医療の進歩などによってで

あり、病気をかかえて寿命だけ延びても人生は楽しいとはいえません。

折角寿命が延びたのですから元気で楽しい人生を過ごしていきたいものです。勿論心の健康も大切ですが、過去を振り返りますと色色人生経験をして参りましたが、波乱の時代（学生時代を含み）が特に懐しく思うのは歳のせいでしょうか。

完全に体調が戻りましたらボートの免許を取って好きな海釣りの出来るのを楽しみにしております。

今年の画題

64期　栗田　行雄

今朝、東京は久しぶりの大雪です。きのうの夕方より気温が急に下がり風邪を引いてしまった。熱で熟睡できず少々吐き気もあり気持が弱気になっているから、老人の愚痴か感傷ごとにならねばと思いつつ書いています。

昨年十二月九日、これも久しぶりに静岡の浅間山に登りました。おととしは、徳願寺から静岡市街を画いたので、今度は母校を絵にしてみたくて、何か資料がとれればと、旧ロープウエーの終着駅の赤サビたベンチを引っぱりだしてスケッチして見た。

眼下に草深町の町並みや母校の全景が見渡せる。古い瓦屋根とその甍をとりまく植木のある家がまだ点々と残って、屋敷町の中の母校といった面影はまだなくなっていない。学校の周囲をめぐらした溝、樹木もある。校庭と校舎を隔てる段差、この段々がいい。昔あった木造平家建の工作室、射撃場、飛込台のあるプール、今これを画き込んでもいい。

この段差の上から下野先生が出征していかれ、間処校長が獅子吼した。あれからもう半世紀、50年の歳月が経過するというのに、街の歩みとは、こういうものなのか。

校庭に一周二〇〇米だったか競馬場形のラインがあった、それを何周かするのが私達の入試だったな。本来なら、小生など不合格で、彼が入学すべきであったのに、目の前でドンドン体列から落伍して、追越すわけにもいかぬ小生の気をもませた同級の天才杉山君も、六月十九日の空襲で焼死してしまった。天命を全うしていたら今頃脂ののった学者にでもなっていたことだろう。とりとめなく空想がひろがっていく。

スケッチの方は、どうもむずかしい、平凡な絵になってしまいそうだ。

胸になつかしのマークを付けた女子学生がフーフーいいながら駆けて通る、「男子はいないの」と聞いたら、体育は男女別々で、家庭科は男子はやらないという。小生が「男子も家庭科をやった方がいい」といったら「そうだ、そうだ」といった返事がきた。百段のところで、これも我が娘のような女教師がピチピチ指導していた。ちょっと声をかけたら「先日72期の先輩が、俺の頃女子は七十人位だったよな、今は一二〇人だって」とおどろいたとか。俺達の時代は「〇」だ、ざまあみろ。

どうも母校の絵はむずかしいな。ものになるかどうか。

以前二科展初入選の記事をのせてもらったが、お陰様でそのあと昨秋まで連続5回入選させてもらいました。3回は張子のベコで、4回目は首都高をトラックとタンクローリーが疾走しながら交叉する「一九九〇年TOKYO」という題の絵でした。昨年は「海辺の裸婦」で一昨年あたりから裸婦が多くなりました。ピカソもそうであったように、今の私にとって、女性の体は益々美しく、悲しいあこがれです。

今年の年賀状で鈴木明郎氏に「今年のテーマはヒューマンです」と書きました。少々キザでHUMANなどロからは出さぬ方がいいと思っているところですが、それでも小生ヒューマンという言葉は好きで、これも静高時代英語の副読本に「A HUMAN BOY'S DIARY」というのがあり「人間味豊かな少年の日記」と訳し、少年時代の心を暖かくしてくれたし、最近では、ノーベル賞作家ソール・ベロウが「盗み」の中で、四人の男性と結婚し、三人の子供をもうけ、女ながら翔んでる仕事をこなしているクララ・ヴェルドと、一方、三人の妻を迎えワシントンの政界にあって外交問題の権威として尊敬される現役パリパリのテディ・レグラーとの長い交情を、クララをして「ヒューマンペア」といわせていますね。クララが今私の心を暖かくくるんでくれています。さてこの秋どんな絵ができるか、あとしばらくのお楽しみにしてください。

小生の絵は生業である画材商の片手間、気盛に画く絵ですから、専門家がみると失笑するでしょうが、それでも小生にとって絵は、素直に自分をぶっつける唯一の対象となっているので大いに力が入ります。そのうち何かの賞にでもありつけたらと精進しているところです。

茫々四十年
長谷と城内の日々

68期　鈴木　俊彦

藤平さんという〝呑気な父さん〟のような物象の先生がおられた。私はその最後の教え子である。昭和二十年、長谷の木造校舎に入学し、中村藤平先生のクラスに入れられた。階段教室でノギスとマイクロメーターの使い方やベクトル力学の初歩を教わった。

五月の中間試験でマグレというべき好成績をあげてしまったので階段教室の一隅で藤平さんから「陸軍幼年学校を受けてみないか」と薦められた。その気になりかけたところで校舎は空襲のため焼け、終戦となり、無医村に疎開した私は赤痢で生死の境をさまよう。一年生にして休学の止むなきに至った。

ションジイと呼ばれていた後藤教官は怖かった。訓辞を垂れてニヤリと笑うので生徒はつられて笑ってしまう。するとションジイはその生徒を不真面目と睨んで頬をつかみ、二・三度揺さぶって、地べたに倒す。級友の桜井昌一郎君

（のち野球選手）は〝この魔手にかかって倒された、犠牲者〟の一人だった。

軍人勅諭を覚えかかったところでの終戦だったので、本格的な教練は経験しないで済んだが、ションジイの恐怖は忘れられない。その語源はションナイジイサンの略であったようだ。

昭和二十一年から二十二年にかけて掛川中学校に転校。二十二年の春復帰して小鹿の三菱の校舎に戻り、やがて城内に移転した。

城内の校舎で高校二年生になったとき通年ホームルーム制が敷かれ、私は13HRに所属。担任がKINPEIのニックネームで知られた堀先生だった。歌舞伎役者のようでもあり、その冷やかな能面で堀先生は大分損をされた。生徒からみて〝距離感〟のあり過ぎる存在で疎んじられてしまったのは今思うとお気の毒であった。

私達13HRの悪童共は、誰が言い出したというのでもなく堀先生のボイコットを決議してしまい、〝連判状〟のような署名を学校当局に突きつけ、担任の更迭を迫ったのである。

今にして思えば民主主義の履き違えであり許されることではないが、その要求を学校側も呑んでしまった。堀先生には申し訳ないことをしたものと、卒業後四十年を経た今、13HRの一員として頭を垂れるのみである。

このHR活動で楽しかったのは秋の卯高祭である。土人の仮装行列をするため全員が全身に墨を塗りたくり腰ミノをつけて校庭を練り歩いた。荻野純夫先生から教わったインドネシアの唄〝ノーナマニシャパヤンプーニャン〟をうたって呉服町とか七間町に繰り出し、そのままみんなで銭湯に突入したからたまらない。浴場は一大恐慌をきたした。料金をどうしたのか、どれだけ弁償したのか全く記憶にない。

新聞部に所属し卯高新聞の編集に携わった。一年上級の浅場英彦さんや飯田淳さんが、手慣れた原稿の書きっぶりで、ひどくベテラン記者に思えた。甲子園に出場した野球部の活躍を取材するため関西に出張したが、その旅費は、映画館、書店、文具店などを巡って得た広告料で賄った。達文家の雨宮明生君は腕利きの営業マンでもあった。

男子だけの学校に昭和二十五年春、女子が数十名入学してきた。あの砂利だらけの校庭に躍動する女生徒の体操着姿にうろたえ、眩しい思いで見やったあの頃が、やはり〝青春〟だったのだ――そんな感懐に耽る年齢を迎えている。

夫婦とは……

70期　大高源之丞

ここ二・三年、四月一日が近づくと、何となく落ち着かない。それは、「夫婦って、何なんだろう」という結論の出しようのない自問に、回答を出さなければいけないというような気もするし、そんなこと分かるはずがない、という無駄な問答をしているような気持にもなるからである。

―夫婦って一体何なんだろう―

四月一日はわたしたちの結婚記念日である。結婚した年が一九六五年であるから、今年の四月一日で二十八回目を迎えたことになる。われながら随分の回数を重ねたものだなあと感慨ひとしおである。

四月一日は桜の季節であり、官公庁や学校、多くの民間会社の年度替りの最初の日であるが、また一方、巷では「エープリルフール」と称して、マンガチックな雰囲気をそそりたてる。

結婚がきまり先輩諸氏諸兄にこのことを告げたところ「えッ？本当かい？」「わざわざ皮肉っぽくそんな日に……」といわれたものである。しかし、当のわたしは大まじめ。しかも、この日を選んだ理由は簡単である。つまり、この年のいわゆる「お日柄の良い日」の結婚式場は、この日しか空いていなかったからである。

それから二十八年。一口に二十八年というが、二十八年という歳月は社会・風俗・生活環境の変化はもちろん、個人の生涯に占めるその時間の比率は大変なものである。

たとえば、わが家での白黒テレビはカラーになり、黒一色のダイアル電話はカラフルなプッシュホンである。家中が集まって暖をとっていた電気ごたつや、一台しかなかった扇風機は今や部屋ごとの冷暖房をかねたエアコンに替っている。

ヒノエウマに生れた長男はすでに社会人となり、続いて生れた二男も昨年から社会人の仲間入りである。妻にしては、増える体重と白髪の量に心を痛めながら、ヘルスメーターや手鏡とにらめっこである。わたし自身も、歯は抜ける、老眼鏡は手離せない、物忘れは多くなるなど、まさに初老の現象である。

このように二十八年の歳月は紛れもなく過ぎていったのである。ところが、である。ところが妻と過ごした二十八年間の日々が、今のわたしには、どうしても具体的な実感として捕えることができないのである。

それは故郷を離れる十八歳までの十八年間の、記憶の中にびっしり詰まった個々の思い出の重さに比べると、大変に軽いのである。

わが故郷の田舎の町の一本しかないアスファルト道路の駅前の交差点に交通信号がついたときの興奮。小学校（当時は国民学校）時代、登校の途中米軍機の来襲による警戒警報のサイレンが鳴り、それが間もなく空襲警報に変わると、海岸沿いにある防風林に逃げこみ、解除になるまでの間そこで時を過ごし、そのまま学校へ行くことなく帰宅したときの恐怖感と空しさ。あるいは、終戦後の闇市に並んで、十個三十銭のイモアメを手に入れたときのうれしさ。

そんなことなどを静かに回想してみると、何年の何月頃のことなのか、またその周囲に誰と誰がいたのかも思い出されそうなのである。

年を取ると時のたつのが早い。ましてや五十歳を過ぎるとなお早い、とよくいわれる。これは、ど

ういう意味でそういわれるのかは知らないが、これに加えて、わたしは敢えて夫婦で過ごした時の流れの早さを痛感しているこの頃である。

「夫婦って一体何なのだろう。」

三人の子供たちが巣立って行ったあと、女としての立場から、改めて妻にこう聞いてみたいものである。

桜の花によせて

74期　藤原　経史

七四期同窓会が四月四日、桜の満開の静岡浅間神社会館で開催。出席者八十数名。久しぶりの同窓会で旧交をあたため、盛況のうちにお開きとなりました。

社会生活も三十年以上の我々同期の仲間として、本当の人生が、これから始まろうとしている。人生五十年の時代から、人生八十年、ひょっとすると人生一〇〇年になるかも。ただ人生長いばかりではいけない。先見性というか、目に見えないものを見る目を養うことが、これからますます必要になってくる。

満開になった桜の美しさにただただおどろくばかり。

その桜の花を見て、ふと思い出したことがあります。

染色芸術家、志村ふくみさんの事です。

志村ふくみさんは、桜の花が満開になる直前に、桜の木の皮を剝いできて、それを煮出し、桜の枝や葉を焼いて灰にしたものを媒染剤として入れて、実にみごとなピンク色の染料を作り出されるそうである。また志村ふくみさんは「一色一生」の中で言っています。

「植物にはすべて周期があって、機を逸すれば色は出ないのです。たとえ色は出ても精ではないのです。花と共に精気は飛び去ってしまい、あざやかな真紅や紫、黄金色の花も、花そのものでは染まりません。」「本当のものは、見えるものの奥にあって物や形にとどめおくことのできない領域のもの、海や空の青さもまた、そういう聖域のものなのでしょう。」

我々同期の仲間で芸術家が三人います。浦田君、前島君、牧野君。彼等も、目には見えないものを見て、見る人の心を感動させていると思います。

我々一般人も、もう少し見る目をもっておれば、現在世の中をにぎわしているバブル現象も、もう少しなんとかなったかと反省。

古人曰く「利は義の和」「義は利の本」。本当にいい事を言っております。現代人も、もう少し、古人の言葉、歴史を大切にしたいものです。

中国の旅

76期　鈴木　浩

昨年八月、中国西北部のウルムチ、トルファンを訪ねました。

かつてNHKのテレビ「シルクロード」にて見聞きしたオアシス都市に向け、シャンハイ（上海）より国内線で五時間ばかり飛行しますと、窓いっぱいの白銀の山々がせまってきます。その天山の山波を廻るような感じで、着陸したのがウルムチ。強い日射にもかかわらず、空気がかわいているためか気持がよい。

井上靖の「西域物語」で昔よりあこがれていた地方なので、ホテル、交通等不便はあったものの大満足の旅でした。トルファンのブドウ棚の下で食べたスイカ、赤く燃える火焔山、高昌故城等、地平線まで広がる砂漠と共にすばらしい想い出となりました。

旅行中いつも頭にうかんだことは、唐の時代に、このような荒地を仏教の教典を求めてインドまで往復した人間がいたということです。飛行機、車なしのその旅の苦労はちょっと想像を超える感じがしました。砂漠の途中で立ち寄った、オアシスの村で子供達がおやつにヒマワリ（向日葵）のタネを大事そうに食べていたのを思い出します。

数学と私（2）

——故吉田耕作先生の回想

88期　山野　武尚

数学の中でも解析学へ入ると、微分方程式論・函数論・函数解析と分かれる。でもこれは厳密ではない。というのは、応用解析・数理解析等があるからだ。

ここでは、日本の函数解析の大御所と言われた故吉田耕作先生を取り上げる。御存知の方もあるかもしれないが、日本へ初めて位相解析を導入された先生である。

先生は、一九九〇年六月に永眠された。この年の八月に、第21回国際数学者会議が京都で開催（詳しくは会報第32号拙稿を参照の事）されたもので、先生は、日本で初めて開かれたこの会議を知らないで、世を去ってしまった。あと二か月であったので、さぞかし、悔やんでおられたのではないかと推測する。

私はこの先生の弟子ではない。尊敬する数学者の一人であったし、今でも尊敬している。

先生の流儀は、私に今でも取り入れられている。それは何か？——セルフ・コンテインド（self-contained）という思想である。これは私が直接学んだのではない。著書から取り入れたものである。先生の著書「積分方程式論」（岩波全書）を読むと載っている。これは、無学な人にも、基礎的理論をざっと説明し、高度な理論へ誘い込み、高等理論を展開するというものである。

私は大学時代、昭和四十八年、先生の集中講議に出席した。学部四年と大学院対象の、「ブラウン運動と確率論」という題目であった。私は大学二年、まだ教養部在籍であった。私が席につくと、助手とか教授達が、前の方に席をとっていて、緊迫した雰囲気であった。その中、紹介された先生が講義を始められる。半群の理論の紹介から始まり、しだいに、高度な函数解析の理論へと発展していく。私は、大学に入ってから解析学にとりつかれていたので、この講義は、とても魅力的なもので、よく解った。

先生の事を紹介してなかったが先生は東京帝大理学部数学科を卒業され、阪大・名大を経て、東大名誉教授、更に京大名誉教授と進

み、私が講義を受けたときは、学習院大教授であられた。

私は、この講義により、先程の本に書かれていた思想を身につける事ができた。

さて、私はこのあと、学部に進むが、微分方程式・函数解析のどちらを専攻しようかと迷ったが、メインテーマは決まっていた――偏微分方程式の解法を研究する――ので、函数解析的アプローチをとる事に決め、函数解析の勉強に打ち込む。先生の専門へと近付き、ヒルベルト空間、バナッハ空間、更に関数空間へと勉強を進めた。これらは、今も脈々と研究の対象になっている。

とにかく、私は高校教員として出発したが、この先生の教科書を二年間使用したので、「セルフ・コンテインドの思想」を実践し、かなりの効果をあげた。

その後、計算機の職種に転向したが（第32号参照）、原子炉の仕事をやり、もう一度、数理物理学を使う事になり、先生の書物と再び巡り会った。

また、社内教育、特に新人教育を行うにあたっても、この「セルフ・コンテインドの思想」は役に立つ。

数学については、またの機会に述べる事にして、今日は、吉田耕作先生の「セルフ・コンテインドの思想」を紹介した。この稿を読んで、得る事があれば幸いである。

静岡と「空の下の遊び」

100期　船橋　智

静岡を離れて八年が過ぎた。私は元々が静岡の出身でなく、親元もすでに関西に戻っており、静岡はもう個人的にあまり縁のない場所になってしまった。

それにしても、今にして思えば静岡とは実にいい所だった。

私は静岡には、高校時代も含めて八年間住んでいたが、そのうち五年間を日本平のふもと「池田山」という所に住んでいた。ここは辺り一面お茶畑に囲まれていて、日本平へのハイキングコースの入口にもあたっていた。通称「吹き上げ」と呼ばれる池田山の山頂に至る畑道からは静岡の平野を一望に見渡すことができ、南アルプスの山々や駿河湾まで望むことができた。

私はここから藤枝の山すそに日が落ちるのを眺めるのが好きだった。季節によって日の落ちる位置は大きく変わる。やがて街の灯がきらめき始めて美しい夜景、そして空は満天の星空となるのだ。

「吹き上げ」から奥へ山道を下ると、途中富士山が素晴らしい表情を見せるポイントがあり、さらに下ると谷間には小川がせせらぎ、平沢観音という寺があった。私はこんな場所を自転車で走り回ったり、犬を連れて遊んだものだった。

静岡には釣りができる川や海がたくさんあった。巴川、安倍川、鯨ヶ池、用宗…。また在学中は山岳部にいて、安倍奥の山々、愛鷹山などは、ホームグラウンドのようなものだった。

私は静岡というと、空の下で遊んでいたことをこうやって思い出す。空の下の遊びがとても日常的なものだった。

＊　＊　＊

最近「フィールド・オブ・ドリームス」という映画が評判になった。ケビン・コスナー演じる「息子」がとうもろこし畑を切り開いて粗末な野球場をつくり、そこで他界した往年の名選手の霊が集まり、無邪気に野球を楽しむのである。そして、野球への夢かなわず無為の日々を送っていた父親まで現れ、息子に言う。「ここは天国かい？」と。彼らにとって、野球とは最高に楽しめる遊びであり、野球場は天国、ここでまったくの子供になってしまうのだ。

私はこの映画を見たとき、何故か静岡で遊んでいた日々を思い出していた。この映画には大の大人がここまで子供になれる、馬鹿になれる、夢中になれる、その素晴らしさを改めて感じさせるものがあった。

「天国から来たチャンピオン」もそうだったが、アメリカには一生を遊び通す「心意気」というか、エネルギーがある。夢がある。心底うらやましいとも思ったが、同時に、日本人が何か忘れ去ってしまいそうな大事なものがここにあると思った。

そう、とりわけ「空の下の無邪気な遊び」を半ば積極的に、年を追うごとに忘れ去ろうとしている都市がある――それはこの東京だと思う。周到なマーケッティングにもとづく、仕組まれCI（コーポレートアイデンティティ）化された遊び、いわばフェイクの遊びが、リアルな「空の下の遊び」に益々取って替わられようとしている。しかも、その東京的遊びのスタイルは「最先端」であり「トレンディ」なものとして、マスメディアを通して、また日常のビジネスを通して日本国中を、時には周辺諸国までリードしているのだ。

これは「自然」な状態だろうか。これでよいのだろうか？　いいわけがない。私達は東京ではないもうひとつの心の故郷をもつ者として、東京という都市のもつ国内外への影響力を自覚し、これからの子供たちや、私達自身の楽しみのためにも、東京に「リアルな空の下の遊び」をよみがえらせることを実践していかなくてはならないのではと思う。

私はユートピアンだろうか？

ユートピアンでもよい。見果てぬ夢を追うことはきっと楽しいことだと思うから。

こんなことを考えていたら、久し振りに「アヴァロン」（ロキシー・ミュージック）が聴きたくなってきた。

◎各期の幹事は、ぜひ幹事会へ出席してください。もし欠席の場合は代理の方に依頼をお願いいたします。

◎幹事が未定・不明の期では至急幹事を選出して、事務局まで連絡してください。

〒153　目黒区上目黒2－18－13
山中ビル　タカラ歯科医院内
静中・静高関東同窓会
薬科名雄（87期）

静岡だより

今年こそ!! 野球部の活躍

第三十四回静高―静商の野球定期戦が四月二十九日、草薙の静岡球場に一万三千人の観衆を集めて行われ、猛打の静高が静商に六長打を浴びせ、10―3で快勝した。この勝利で通算成績は22勝12敗となった。

今春の静高は、打線が売り物である。春季中部大会で、チーム打率が三割を大きく上回り、クリーンアップの和田・西村・杉本にいたっては、五割から六割の打率を誇っている。

投手も、エースの西村をはじめ望月正、岩淵と調子が良く、投打が噛み合えば、十分に甲子園を目指せるチームといえる。

さて試合は静商の初回の一点のまま、序盤は静かに進行した。静商の投手は軟投派の服部。服部には昨年が二点に抑えられているので、このまま〝すみ1〟になってしまうのでは―という不安は、六回に一気に吹き飛んだ。

杉本健の三塁打で同点とし、すかさずスクイズで逆転。七回と九回にも長短打を集めて四点ずつを加え、結局十五安打で十点を奪っての大勝となった。

西村主将曰く「秋よりもバッティングが良くなって来たし、二年生もレベルアップして頼もしくなった」、船川監督曰く「守備が雑だったが、望月が良くなって使えるメドがついた」

昨秋の東海大会では、市岐阜商と三重高に五失点、九失点と崩れた投手陣だったが、この日ぐらいに踏ん張れば、打撃が好調なだけに、夏は期待がもてると見た。

〔定期戦〕

静高	0	0	0	0	0	2	4	0	4	10
静商	1	0	0	0	0	0	1	1	0	3

▽望月正、岩淵―井上

▽三塁打＝杉本健、岩淵

▽二塁打＝鈴木2、望月崇、和田

また、現役戦に先駆けて行われたOB戦では、三番・宮城（昭和五十八年卒）の五打数四安打の活躍などで、静高OBが6―5と静商OBに逆転勝ちをおさめた。

〔OB戦〕

静高	0	1	0	0	1	4	0		6
静商	1	4	0	0	0	0	0		5

また、この定期戦に前後して行われた春季高校野球県大会の中部地区予選と本選でも、静高は静商と二試合を戦った。

中部地区予選では、準決勝で静商を打ち破って決勝に進んだ静高だったが、地区決勝では東海工に敗れて2位となった。

東海工、3位となった静商とともに県大会に臨んだ静高は、一回戦で西部4位の小笠農を7―0の八回コールド、二回戦で選抜出場で東部1位の御殿場西を11―1の五回コールドで下し、準決勝に駒を進めた。この時点でベスト4に残っているのは東海工、静高、静商、浜商の四校。中部勢の力を見せつけた形になっていた。

静商との準決勝は、中部地区予選と定期戦の結果から、楽観論が多かった。しかし、この日は静商のエース服部が絶好調。コーナーを巧みにつく制球が抜群で、スピードがない分だけ打ちづらく、気がついた時には九回二死まで何とノーヒット。向川が根性でレフト前に運んで四球のランナーを返して面目を保ったが、結局5―1で敗れ、東海大会への出場権は手にできなかった。

〔県大会準決勝〕

静高	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
静商	0	1	4	0	0	0	0	X		5

ちなみに、決勝戦は東海工と静商の顔合わせとなったが、静商は服部を温存?し、四回まで9―2と大量リードしながら、10―9と大逆転を許した。〝草薙すずめ〟が言うには、久し振りに甲子園が目指せるチームとなった静商が、「夏の県大会で第一シードは甲子園へ行けない」とのジンクスを気にしたとのこと。真偽のほどは、確かではない―念のため。

余談ではあるが、静高野球部の副部長に宮川誠（私と同期の八十五期）が就任した。船川誠監督と一字違いで少々ややこしい。宮川副部長は、三月まで静岡南高の野球部部長を務めていた。

参考資料

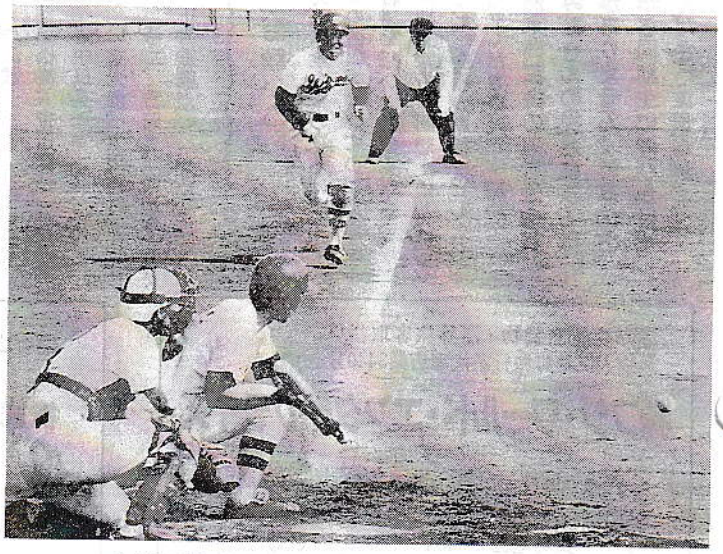
野球部部長＝田中省三

同　副部長＝石川　智

同　副部長＝宮川　誠

同　監　督＝船川　誠

（85期　吉水　廣）



〔定期戦〕静高6回，井上がスクイズを決め，杉本が逆転のホームを踏む。（静岡新聞社提供）

平成三年度会費拠出者

（順不同・敬称略）

平成3年11月1日～4年3月31日

四三　長戸寛美(4)、吉江誠一、北里良夫

四五　須山達夫(5)、柏木千秋、蝦原一郎

四六　磯塚倫三、鼠入秀夫

四七　中村豊夫、野口真

四八　富谷精一

五二　岩本良雄

五三　島田良彦、杉山滋夫、森下洋、宮沢四郎

五四　安東哲夫、川本平八郎、山口道也、禰津三朗

五五　堀江重遠、木村康弘

五六　青木良文、奥野進(3)、原田昇左右、横森桂、石塚由雄、中村治郎

五七　島根光明、酒井博、小花正昭、森下恒彦

五八　奥野広、伊藤健三、島村悟須山静夫、猪瀬忠賀、萩原義臣、宮崎佐一郎、望月恵一、鈴木栄三、鈴木勝義、世古真臣、原木睦雄、桐沢誠、志村規

五九　富永利夫、加藤恵一、大村和夫、長谷川邦三

六〇　堤崇、萩原荘太郎、池上晴介、鈴木明、原善三郎、里見元一郎、尾崎龍男

六一　大村富士男、小久江浅二、相羽達雄、萩原将弘、清水泗郎、長瀬脩

六二・六三　海野昭平、勝山弘之

六四・六五　浅井幹夫

六六　藤原朝則、原野谷朋司、村越立彦、安田正弥

六七　長倉孝三、大森恵吉、小杉弘、増田安国、滝川博、田中映吾、岩崎為明、角田栄一、稲川雅久、手塚重明、塚本三千雄

六八　小林功典

六九　松島玲子、堤章、田川邦子、加藤哲也、原田淑子、原野谷和弘、萩野嗣人、杉山正博、倉田聡

七〇　村松勝治、佐々木政之、吉田修、牧野甫、鈴木明次、北村孝、大地不二雄、藤巻貞夫、森野寿美子、小山清継

七一　酒井力、安藤竜男、下薫

七二　種茂雅之、石川正明、八木伸明、仁藤宏次、山村方人野崎誠介、徳田雅子、桜井亮介

七六　鈴木浩、北村修

七七　山内幸太郎、大岩蓮、岡村稔、宇野明彦、青山晃三、菅弘彦、藤田武敏、杉田晃岩田和子、飯田善久

八〇　多田佳忠(4)、角谷勝彦(4)、長倉利夫、岩崎行男原田雅之、島口崇

八一　鈴木真男、嶋田政子、松永旭

八二　堀内淳司、柴田康弘

八四　吉野文江、成田恵理子、村松哲太郎、池野博、司馬立鳥居信利　大隅恵子

八五　浦田正、池田幸司

八七　平岩正史(5)、諏訪二郎、芹沢誠

九二　平松裕、吉田寛子

九四　野中保晃

九五　加藤光俊、太田洋行、田代裕二、富岡豊、渡辺寧、井上香里

▽お願い△

◎会報は全会員のひろばです。この会報についてのご意見やご希望をぜひお寄せください。

◎同期会報告、回想・随想・詩歌など、会報の原稿をどしどしお送りください（15字詰めで）。

◎**関東同窓会の運営は会員みなさんの拠金によるほかありません。幹事の方から同期生に呼びかけてくださいませんか。**

国際線航空貨物・海外旅客取扱い
運輸大臣登録旅行業代理店業3440号
㈱フジ・ワールド・エンタープライズ
代表取締役　中馬敏雄（70期）
〒105東京都港区浜松町2-8-9 春原浜松町ビル
貨物電話　3434―0591（代）
旅客電話　3437―5861（代）
FAX　3434―5537

総合広告代理店
株式会社　アドプロ
代表取締役　朝比奈正三（67期）
東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階
TEL 03-3254-2171(代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック
熱函病院
院長　小坂博（67期）
住所　熱海市春日町12―2
TEL 0557-83―3131

新東京印刷株式会社
代表取締役　梶原由三（67期）
東京都中央区八丁堀2-1-7 神鋼ビル
TEL 03-3553-8981(代表)

静中五一会会員の 懐かしの映画 想い出の映画 ベスト51

昭和六年に静岡中学に入学された五一会の皆様がアンケートにこたえ、まとめられた本を最近入手したので、ここに戦前・戦後の作品、合計51作品を列挙します。「あなたの心を打ち、感激した映画は、どの作品でしょう？」

なお、構成編集をされた狩野安彦さん執筆の「あとがき」の大要も、ご諒解を得てここに掲載させていただきます。

■戦前映画ベスト26

1 望郷
2 未完成交響楽
3 会議は踊る
4 舞踏会の手帖
5 駅馬車
6 モロッコ
7 オーケストラの少女
8 外人部隊
9 モダン・タイムス
10 巴里祭
11 街の灯
12 巴里の屋根の下
13 歴史は夜作られる
14 商船テナシチー
14 或る夜の出来事
16 西部戦線異状なし
17 制服の処女
18 女だけの都
18 どん底
20 格子なき牢獄
20 たそがれの維納
20 トップ・ハット
20 地の果てを行く
24 ペンガルの槍騎兵
24 スミス都へ行く
26 我等の仲間

■戦後映画ベスト25

1 カサブランカ
2 風と共に去りぬ
3 第三の男
4 道
5 ローマの休日
6 鉄道員
7 哀愁
8 心の旅路
9 大いなる幻影
9 真昼の決闘
11 禁じられた遊び
12 サウンド・オブ・ミュージック
13 荒野の決闘
13 太陽がいっぱい
15 誰がために鐘は鳴る
15 シェーン
17 戦艦ポチョムキン
18 逢びき
18 天井桟敷の人々
18 眼下の敵
21 黄昏
22 慕情
23 戦場にかける橋
23 裏窓
25 エデンの東

「懐かしの映画・想い出の映画」について、静中五一会の皆さんにアンケートをお願いいたしましたら、予想外に大勢の方よりご返事をいただきました。当初の計画では、いただいた回答を整理・集計しまして、ワープロで打ち、コピーしてお分けする予定でおりました。しかし皆さんより、よい企画とか、ユニークなものだとのお言葉をいただき、つい欲が出てこんな形の小冊子（82ページ）ができ上がりました。改めてご協力いただいた方々にお礼申し上げます。

この種のアンケートは、今までにも幾つもあったと思いますが、私達のこのアンケートは、昭和のはじめに静岡中学校に在学し一緒に学んだ仲間が、同じ時代に同じ映画を観て感激した映画の数々の中より選んだというところに、意義があり、価値があり、特色があると思います。

編集にあたっては、まず最初にいただいた原稿の字数を数えて、これを原稿用紙に書きとり、割付をするのに予想していた時間の数倍もかかりました。途中で大変なことに取り組んでしまったと思ったりしましたが、なんとかまとめることができまして、ほっといたしました。

今回のアンケートに寄せられた映画の数は、戦前上映された映画が57本、戦後は95本とたくさんの映画が選ばれました。その中で2人以上が選出した作品で、その合計点が10点以上の作品を採り上げました。その結果、戦前の映画が26本、戦後が25本となり、たまたま「五一会」と同じ数の51本となって、語呂合わせのような結果となりました。

このアンケートから、「五一会」の皆さんの想い出などが紙面より伺うことができまして、原稿を整理しながら唇がほころぶことが多々ありました。

ともあれ、この「懐かしの映画・想い出の映画」の小冊子は私達の若き日の想い出の記録として、懐かしんでいただければ望外の喜びです。

〈注〉平成2年11月発行。たいへん好評で在庫はありません。

新日本証券株式会社
相談役　石　厳（53期）
㈱新日本証券調査センター常務取締役　大谷川　治弘（70期）
常務取締役　海野　幸雄（71期）
国際本部課長（香港駐在）　小林　一郎（90期）
東京都千代田区神田駿河台3-11　〒101-03
TEL03-3219-1111（代表）

富士通電子デバイス特約店・OA機器販社
東海デバイス株式会社
（旧社名　東海電気工業株式会社）
顧問　清水照彦（61期）
本社　東京都目黒区目黒4-6-33
TEL03-3791-1181(代)　FAX03-3715-1558

トッパン・ムーア株式会社

宮澤次郎 (42期)

東京都千代田区神田駿河台1－6
TEL (3295) 2411 (大代表)

鈴与株式会社

取締役会長　鈴木与平 (44期)

清水市入船町11－1
Tel 0543 (53) 3111 (大代表)
東京支社　千代田区丸の内2-3-2 郵船ビル4F
Tel 03 (3284) 0551 (代)

株式会社 東電社

取締役社長　岩波信平 (42期)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (3271) 2701 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1－5－1
TEL (3833) 2111 (大代表)

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長　奥野　孝 (53期)
取締役社長　奥野　進 (56期)
取締役副社長　奥野　広 (58期)

本　社　東京都台東区寿2-5-12　加瀬ビル
Tel 03－3842－6831 (代表)
静岡事務所　静岡市安東2-8-14
Tel 0542—46—9378

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長　奥野　孝 (53期)

本社　東京都台東区東上野2-18-7　共同ビル10階
TEL 03-3834-5331 (代表)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役　奥澤　徹 (59期)

本社工場　横浜市瀬谷区橋戸3－25－6　〒246
Tel 045-301-5545　FAX 045-301-5547
大和工場　大和市深見3706－1　〒242
Tel 0462-62-0340　FAX 0462-62-0343
東松山工場　東松山市大字新郷88－47　〒355
Tel 0493-24-2511　FAX 0493-24-2513

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役　岩井平一郎 (57期)

本　社　静岡市国吉田645
TEL 0542(62) 1111 (代)
東　京　中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03(3272) 4651 (代)

建築設計・監理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役　成岡英彦 (67期)

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル
TEL 03-3363－8604 (代表)

株式会社 冨士越
株式会社 冨士越化成

代表取締役　野澤正憲 (64期)

東京都渋谷区東2－14－9
TEL (3409) 3342 (代)
TEL (3400) 9541 (代)